



15
508
19



後漢魏桓不昔仕鄉人勉之曰于祿求進以行志也方
今後宮千教其可損辛厖馬万匹其可減辛左右權
豪其可去乎慨然嘆曰使桓生行而死還於諸子何
有哉朱子語類
百三十五

嗚呼通之似一使カ之似一使カ漢の世猶カ之似一使カ
况や季世とや陳仲弓が太守の請と分ち官者の
葬と送るやカ之似一使カ之似一使カ之似一使カ
ありては豈一朝の官と死に人をもよのほす
五たれん

。内学 災異 諷諭 風角 鳥占の類 外学 六経 義理 の字

。漢儒の注書、只注難曉處不全注、尺本文其辭甚簡、

類器 古人の注解甚簡、後人の注解甚雜、時風如是、
歛、れ、後、世、直、と、云、ふ、亦、遠、く、く、其、代、の、文、字、

と會得ずれば、事甚難、以此註解家々に思、
書亦多く、下り、讀者多岐、は、ひ、て、古、人、の、意、と、

考ふるに、
次や、大義論と以て自家に傳
と併ぬ類を、ことあるは、人とならざり、

。或人因縁の字義、共、よ、く、讀、其、分、意、如、何、と、云、曰、

因ハ由也、縁ハ循也、
やは、一、草、木、の、種、子、の、こゝに、是、根、枝、花、葉、の、由、来、に、

其、生、じ、る、の、不、能、然、と、ハ、事、ゆゑ、の、由、縁、皆、因、り、て、

。國ハ笏の本字、笏ハ俗子也、
音、石、カ、無、子、者、曰、石、俗、誤、
加、ウキマシ、
か、字、こゝに、ハ、俗、子、

加、石、カ、無、子、者、曰、石、俗、誤、
か、字、こゝに、ハ、俗、子、

望し彼三障のまを立覆ひしゆん比しゆりしむらに

又依く日度にあふられ端らんに障れまるとをよみ

。凡そ曆家春秋の彼岸會と記さるるゆゑ昔昔春秋の

の日と中果に依る事にはせしゆり女信家の曆本にえし

進せを春秋二分より三日のとき其初より六日ありと中日を

定め九つありと依りすとすまは彼岸に入日若没日（時）は

一日と定て次の日と合せし故變なを（古き曆とるに
時ありたり）

貞享曆の没日を用ひし故しと二分一日と隔て彼岸

の初とせり

又彼岸の中日を輪正面に没を故し淨業日想觀

の時とし曆家此説に曰日の正中を者春を春分

の最三日秋を秋分の後三日（三）は日赤道と也

と云はれと云ふに二分ありし日赤道と也

日の西に入れと正方と也

。天竺の曆ハ一歳と云ふとせり（熟時 自正月 至四月 茂時 自五月 至八月）

寒時（自九月 至三月）されと云ふ九月ハ仰土（上）と云ふの初月なり

阿蘭陀等の曆ハ二十四時と一瞬と六十刻と定ち西の

時と一日の初を日国月と置りなりと云ふ寒暑ははる

林寺招賢士，修西方淨業。其地多
 白蓮華，具彌陀佛國。以蓮華分九
 品，接新性，故大師稱其院曰蓮社。
或云會此社者不為名利厭泥
 所汚，喻如蓮花，清淨故為之。又大師門人法
 要巧刻木為十葉蓮花，植此池中。
 用機園，凡折一葉，是一時與刻漏
 無差，俾禮念不失。正時故名蓮社。
社結縵聚會處假之為名
 唐詩云：通本末，無所詰。曰：雪那得石，期遠公。松刺蓮花，漏梳向山中。禮六時
 日。本淨宗蓮社號傳。

釋白蓮社。京兆人，味譯其姓族德。
 守宏智，鋒爽逸然，不嗜世味。唯好
 頭密妙音，既洞晚投，鎮西聖光師。
 依淨業久矣。四條院，天福元歲。
 三月從國使橘尚書入宋。理宗紹
 定六年登廬山，謁禱禪師，傳衣鉢而皈朝。自
 號白蓮社。淨宗社號，權輿于此。且
 師乃廬山義祖也。先師門人又有教蓮社等
 蓋自此時社號間在歟。
 勅額杖桑廬山大阿彌陀經寺。開

山第一祖賜原特号旭蓮社大乘
澄圓大菩薩智演回師大和尚泉
列大身郡產也姓源龙典廐義氏
之裔泉刺史義貞男母百濟氏嗽
妄嗣禱刈家原文殊大士一夕聞
兒啼庭籬便開戶奉以為子五歲
親文墨暗誦曼殊神咒回里嘆異
焉師梵相奇偉性恬而器因九歲
入東大寺師円雅公而菴染授異
長惠解天然才氣秀逸研窮俱舍
唯識園真洞徹三論花嚴妙旨既
而至模尾山精練两部秘教且善
悉曇字義然傳台宗於兼遍觀豪
二師解友東福虎関公親敲禪要
且久學淨教洛九品西山二流又
遙游東関謁鎌倉光明常譽大和
尚循其將訓稟鎮西正系自今名
望新而盛弘通淨宗勸以称名一

行花園帝文保元年丁巳泛滇洋冬徑冬
入元仁宗延祐四年登廬峰見東林夢曇晉
度大師學輪下而面授無邊海藏
口決傳佛圖惠遠之正脉刺蒙教
外證許在元凡五季巡歷名葡勝
區得謁師印可於此齋携三藏仙圖
將來佛舍利遠公傳持六時礼蓮
花炉及衣蓋文籍若干敝朝實後
醍醐院元亨改元辛酉也共後明登帝召

教聞去以外謂仙家鸞鳳信中龍
虎帝崇其道德正中甲子元年特詔
創梵宮勅号旭蓮社以精舍呼蓮社普救
天下令修般舟三昧益博綜英發我
後村上院真國四年壬午北击康永天變
地大疫疾比屋愁苦天倫惱宸襟
便余演公禠災師應命昇九禁奉
授一乘回戒使王公以下士庶七
日唱一百萬遍念仙應時妖氣忽

退消四民呼萬歲帝感敷之餘特
賜大乘澄因菩薩宗號被紫袍且
敵宣家翰寺額號扶桑廬山大阿
彌陀經寺其封書曰法師袁涉滄
波覆異聞於絕域遊唐縣研妙
棧於碩師宜施食封百戶恩榮
之盛亦如斯而名翼四布振弥天
威風丕漲吉水注流挑廬山傳燈
淨宗中與誰出於師之右乎我國

禪淨兼學道場以旭蓮社為先屬洛

山葦頂後龜山院文中元年北主志云秋七

月二十七日師召大眾而上堂遺

誠普說不異乎且端坐合瓜而辭

衆向自影唱佛名悠然而坐化教

壽九十有餘歲嘗述十勝論覺

論獅子伏象論松風論等若千株

藏寶画今筭行世

大樹家蓮社号

龍雲院	瑞龍院	有章院	文昭院	台德院	東照宮
<small>高松侯 賴重朝臣</small>	<small>尾張侯 光友卿</small>				<small>本國院</small>
雄蓮社	天蓮社	照蓮社	順蓮社	光蓮社	德蓮社
		貴介蓮社号			

○我先君經誠卿所自の法辭と定りしに於て院号の
 上は御位位とありしに
所法衣建中寺の智伽上人
授けしものなり

從二位前黃門春心院院の字の下敷の字
と除を記す

是ハ官位ハ朝家の論令院号ハ侍家の号ハを云ふれハ
 可考也法以しとるは但し中世の身貴族院号の下
 必官位と書し牌子の通式に也

某寺殿及び某院殿と書はりし一塔頭と立し人其の
 院に位牌と安置すは本願の号と定りし法考と
 其下に記せり此等ハ將軍の位牌のしきハ

等持院殿贈一品大相國仁山妙義大禪定或仁山義云

等持院ハ山城國音耶那カドナ衣笠山の麓フモトに建タテられ

鎌倉より基氏タノの爲タメに香火の場と建て長壽寺

と額せり。故にけ寺にて、尊氏の位牌に長壽寺殿

書カせり。其殿の字ハ法興院殿ホウキョウイン法成寺殿ホウテイジ在マ世に降

稱ナじりて豊後にし猶ナく喚ナく一降の俗凡也京都

將軍家前カ鎌倉將軍家の時北条氏も本院とタテきて

卒後牌子に某寺殿カらど書カしり。世の凡俗カとるり

。凡そ貴人の法名にハ必官位の上に院号とカぶしり。む

近世に及ヒてハ年侍ヒトサマとカども傍家カ屋カつカひや大隆院と

書カす。日蓮宗カ如カきカ高カ人カ農カ民カとカども金カとカおカせカば院号と

題カす。是カにカ至カてハ川原者カにカ之カ院号と授けカけカりカるカ京カに

不カさカしカるカ侍カ持カハ念カ念カの部類也カ何カとカ士家カとカひカりカ皇

子カ子カ日蓮カ宗カの私カにカ至カれカ鳴カ伴カ

古例院号の上に位位とカ書カはカ号カありカやカとカ云カ人カあり

平日相列鎌倉泉谷イヅミカヤの慈恩院の牌子の帖に

贈正二位大休寺殿在カ山源云

これ足利直義タカユキ卿ノの法名也先公獨カ院号

錦山殿と稱すの法名也

從五位下馬頭

のよに官位と墨をなまひしにあらず

。法名に戒名あり道号ありとあれど中せまれば貴人といふ

ども只二字の法名のみ別は道号と書りしり

御堂園白道長公の法名と行寛と号し多田伴の
戒名と満慶と号せし類也

其後在家別當といふ房号法名とつて事を見ゆ

熊谷入道と法刀房蓮生寺稱せし類也 これ法刀を以て
法師と号し

鎌倉將軍家の時宗の禪僧多々別は道号

と稱するものありしり 猶二字の法名のものを

五位尼孫法名と如實妙觀大禪定尼と号せし類也

徳川北条泰時の位牌徳倉常樂に在りそれに

過云觀阿禪

過云法名にありし後せし書
飯え飯本寺の也

のあり又經時の牌子鎌倉光明寺にありこれに寺号

と書ししと道号あり 禪宗の寺号とあり

其号に

蓮華寺處出樂大禪定門

かく題せり 海老原宗清の只二字の法名ありしり
後の法名のしり

古の位牌ハ大いし雲日首也



禪宗盛に興ヨリてより大人官家の法名に居士号は
書せり今法宗これに效サレて居士と稱して榮ホトとす極
ずりに中阿含經に刹セツ刹ツリ檀ダン士シ居士コジ工ク師シと四姓と一
長阿含經に刹セツ刹ツリ羅ラ門モン居士コジ首陀シュダと以テ四姓シと云へり
居士コジとハ磬ケツ喻ユ經キョウに所謂ソウイフ毘舍ヒセと曰ハクこれ高賈カウカ市人
の稱呼也又長阿含と極ずりに管生居士コジ業多シ積ツク財ツカ室シツ
名ナ為ニ居士コジと云へり善ゼン門モン品ヒン神シム註チュにも居士コジと多財居士タサイコジ
者モノ也ナリとあり但シ又タ云フ居士コジ通ツウ居士コジ山サン居士コジ之ノ工ク号ガウ云フけ中チュウ居士コジ
通ツウ士シと云へり又タ云フ居士コジに充チウ修シュ少シウ也ナリ居士コジハは官カンの稱
呼コトにありずりありあり道家の科品にあり稱コト也ナリ
庶人シヨにして通ツウと供ク行コウする者モノと居士コジと呼コトハ可カ也ナリ今イマ公コウ卿ケイ
大夫タフ号ガウと以テ居士コジと稱コトする人ヒトこれと幾ケイセシるに似ニたり何ナニ
ぞありめん

○我國ワカニ竹タケ延ノビ臣シ臣シ切キありて死シすれば諡シ辭ジと賜タマフひて号ナリとせり
諡シハ藤原フジワラ不比等ヒヒトウの如ニ也ナリ東ヒガシ之ノ條ジョウ撰セン改カウ家ケ入イ道ダウとん如ニ實シツ
と法ホウ諱ケイありしより大オホく親オヤ氏ウヂ法ホウ名ナと授タマフけしむ也ナリ

而シテ朝アサ此コノ時トキとゞく諡シ号ガウの典テンありし

○我國ワカニ臣シ姓セイにつくするカキ朝アサ臣シ宿シュク稱コトありカキこれと以テ姓セイのナリ号ガウ

朝臣宿稱
初連の類也

三十年のまりの者の春も猶思はれりて教のなる所の
杖に結びしはかりしは亦思はれり

と記してやびりくも思はれり

花ふりしれぬ世のあまら

清凉寺の身掛兵太前門院後高倉姫宮御母北河内院名は邦子

持明院中納言家基郷の女名は忍允し給ひしを名は子親也
陳子三月十九日

世尊の足依に禱り給ひしに佛告にハニメ子親也

法今やとぞハニメ子親也

能野へもて侍人の故年中と増り侍りし其行

か書候侍り

名は川は流しとひきよむに濁る事ありて

葉ハツグリ葉曼茶羅講寺村久代之前宿禰村にあり有る本列座北

の古跡西山檀林の名藍也宿禰シテニヨラの遠き及に

禱りしひきよむとさりしとスギ侍りしとる

西堂は春ほとけスギを奉れりといざらる侍りし

るどに侍りし本スギ曉彼富利にまいるぬまスギと夜と残して

か侍りし川ハニメ務ハニメ侍りし長橋ハニメ本ハニメ村ハニメ廻ハニメら

か侍りし川ハニメ務ハニメ侍りし長橋ハニメ本ハニメ村ハニメ廻ハニメら

のやうして 曉鐘遠く傳へし 生田川の名は 北條の名不
とひし 神なき 時多し 情ありげ 小橋を 田
東麓の すぐし 將と

これと又いざら 田の 園か びす 暎の 声
生田の 社にて 北井と 元芝系と 山に ありき
らん 又治丙午の 名印 信記と 幸て 近之 信と 子と 小を 伝ふ
あやど ちか 志念の 里近く 古戦の 壇存し 傳りし
東西三十餘里 へ だいし 者 幾田の 嫡家 尾馬 而敏 信の 男
而北 今 傳 伊珠 守 信 安 くに 筑て 居城と 本 別上 田 那と 近 止

し といひ けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
昭相 園と 不和 此も あり 水 禄二 年は ありき せ び ね
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
草 花 年々 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
と 春 久し けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
濡す 人の 世は けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
蕭々 荒郊 嗚鳥 飯 人民 城郭 古今 非
當時 誰 識 相 條 下 一片 曉 風 柳 絮 飛
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

芝原村とたりけり之麻庄に命ぬ奈高きくしり里の名四
て奈杯縁ミトリなり一蚕養コハヒの業民好ヨシの所は奈高エニ
の恩オウミにこそ貴ウツキと賤セニきしんふとをかりて昆ミミとよせし
けりものと恩オウミに存ツクひふくしんふとをかりて昆ミミとよせし
たのふか寄ヨシ生ナマ仕シ路ヂありそにに稻イナ置カ天神アマノカミあり
俗ソコに天通大オホ中ナカ津ツ日子ヒコ命ノミハ稻イナ本ホ之ノ別ワケ尾張國別祖オウヱノクニノワケノソノと稻イナ
と稲イナ神カミの神記カミノキに依ヨり國民タマシ如ニに多オホクくて應オウと求モトむ依ヨり仕シ也
中ナカの喪ムシいし一國イツクニと終ハシまれ多オホクくまひ依ヨり仕シり
おとけいせに奈圍ナヱ多オホクく又マタ田イナくても醜ウツクシ恥ハの意イの醜ウツクシ保ホ系ケイ
ふ花ハナのいづき名ナあがずと祀イハヒ神カミの飲イハヒと如ニくまに
まて花ハナ保ホにまマり志シ依ヨりし務ツメ舎ヤに入り倉クラ琅ラウいイとまマく
まマ立タテ地チかりて望ノゾミ眼メ清スし山ヤマ密ヒツにニ麟リン鳳ホウ栖ス門カド園ヰン
凡ソレゾロ聖セウ通ツウず山ヤマ門カドの如ニに神カミ廟ウラの製ツクし賜タマヒひし林ハヤシあり
先マタ西ニシ東ニヒ形カタチにニかくと新アタラシ田イナ依ヨり仕シりシとまマり
あアまマやヤそおはれてニ入イ殿テンにニいりぬ丁テイ櫓ロ房ボウの枕マク室シツ
杉スギ節フシ歳サイに坊ボウ舎シャれん十三ジュウサン院ヰン東トウ西セイにニつツるル依ヨり
瞻テン仰オウしシ階カイとトのノ如ニに長チヤウ席セキ登トウ禱ダウにニしシ香カウ篆セン烟エン
強キヤウ金キン界カイ塵チンくクしシ磬キヤウ音オン隱イン々ツツたり八ハチ人ニン其ソノ迎オウの聖セイ

儀之尊わびやんとかうんやん

法隆寺の佛土安所所造灰侍の寮空上人の時節に化り
まじやうと云く

そくく香と珍く九條くまのに巡り交流

紺殿風回静 玉炉烟絶薰 一偈弥陀佛

他祭事云云

三祀 善尊和尚 東阿大師 の真と神 當山才一祀 天真棄

運上人の像に謁す師ハ華山院内大臣藤師純云の令子

西山の正脈と傳へ名望一世に高りり 當寺とモトヒ基く

圓福寺と勝せり 後醍醐天皇特に紫袍と賜ひて恩

榮そのくに遷すゆりり とも光那院の康永二年六月

十七日に示寂せり 中七世空光上人の時寛正後花園院二年

六月廿二日靈異ありて觀經の姿相と感得せりこれり

日輪山曇茶羅寺と改号ありし 或は圓福ハ後深良院

天文十年二月廿五日 初領の繪命と下り官ちに列り

法ひり 凡そ善峯の丸まぐ檀林の花薫りて

負笈の学徒武と稱すさく曼荼羅堂に掛りゆりし

六院主 炬範 かせ入信侶とて御帳と叩げし心

近くおぼしきものにも丹まの夜清くして慈徳と御守輪
圓月朗ホカラカにして白頭と照らす又類多き聖圖に白ひ
りりも因縁赤く八方四千の相海長トコトに夢長トコトの恩光と
流し一六十万億の金山コシセン時に能觀の室甚かに座し
はるかに大慈大悲の尊容中言はるるにけりも尽し
ぐくく心のゆくもいとわづらひしこれより方より
至る後主とれりや音回と絶せしものと御守希に
志ありしとすらひもいとて宝庫の室像を益以下と出さ
しよりこれとある室に御床とに置いて見せしりらるる
三聖の大像ハ益容七尺あり顏輝カハの子にりて常山才一の付也
おすらに高國部田祐福講寺の三聖と小之尊と称
すらハ曼荼羅本の大之尊に對ゆるものなり
其他思教牧溪の畫圖也大師惡心傍於の真筆也
殿取の涅槃像もせに希有の畫像なりこれおぼ
ふ邊ありず又高祖東漸大師鏡カミの印影とてい
たりし肖像シヨウゾウもす自益自賛也又圓合ウツクの中ウツクに造り
まじりし又殊大士ハ鎮守ハ幡ハタの瑞籙ミツカキより出現
ありし畫像とるや楠ノのやまのたにあり

筆の改えるに^{コシテ}ぞやす旦代への繪旨武將の繪章
金田の業と添は純の光と傍院にして院妻の誕生
と相海一竹のしん

かゝえといは流ひ一ほ水ふくやそに^カつと^カ
上人のくしん

法のあらぬの事もゆきえはむさあらしり^カに
かゝるふ糸糸にまゆりて島ひ^カし^カや^カ日^カ西^カに^カゆ^カ
かん^カと^カす^カ門^カと^カ出^カて^カ吟^カ詠^カあ^カに^カあ^カる^カも^カま^カを^カひ^カ
あ^カり^カ物^カを^カし^カり^カ一^カ縁^カに^カり^カふ^カり^カな^カり^カよ^カ守^カり^カの^カ世^カを

かゝるふ^カ物^カを^カる^カり^カな^カん^カい^カつ^カも^カふ^カい^カ道^カの^カ貪^カ里^カに^カは
ま^カひ^カて^カ之^カ業^カの^カ爾^カと^カ貪^カり^カ竹^カ舎^カを^カが^カし^カ又^カる^カあ^カら^カう^カも^カん
どう^カれ^カも^カや^カれ^カり^カあ^カら^カり^カ本^カ日^カに^カ殿^カに^カ漱^カぎ^カ一^カ夢^カの
春^カと^カ領^カ一^カ竹^カと^カ唐^カの^カわ^カら^カり^カ心^カに^カは^カれ^カ海^カ流^カ光^カ風^カに^カ
派^カ一^カ古^カ池^カや^カと^カな^カり^カ赤^カ童^カ子^カ村^カに^カあ^カり^カて^カ長^カ情^カの^カ大^カ悲^カ
毫^カに^カし^カい^カぬ^カら^カハ^カ膏^カ圓^カと^カす^カ所^カの^カ一^カ區^カに^カて^カ華^カ峯^カの^カ大^カ師^カ
化^カり^カ残^カ一^カ流^カひ^カ一^カ心^カ観^カ世^カ音^カと^カ安^カ置^カ一^カま^カの^カ千^カ溪^カ摩^カ
壇^カ上^カ性^カ惡^カ念^カ怒^カの^カ湧^カ形^カ世^カに^カい^カら^カう^カ一^カ赤^カ童^カ子^カの^カ村^カ呼^カハ
け^カ畫^カ像^カの^カ依^カり^カる^カん^カれ^カこれ^カあ^カら^カし^カま^カし^カす^カは^カは^カ皆^カ大^カ悲

六月より哥量品の洗法といはるる回白行一節の
汗歌各一首と依じしと述く有り

鷲峯雲尽テ耀ニ金輪ヲ遠本新識ニ五百塵

無滅無生亦タ無跡清風特地即天真

浮き舟にハなごころハ迷ルりハつとハ平ニ物ノ結ノ舟

すゝめ、弘治國鷹の目ハれハそハ人ノ徳ノ志ハ何レ也ハり

あはれと勸メ修シしハりハ多ク抄メ集メりハしハ或ハ同法科足

の白紙にハぬスの故とシ珠ハはりびハねハりハそハ

いふハいふハほハるハるハの友手ヲ寫シてモぶハぶハがハねハ眼ニ

かハしハきハす

せハかハらハ命トいハふハとハ高ノのあすハりハとハるハんハ徳ハ不レ

せハかハらハとハハハ浮城歌ハ海ニとハとハとハいハひハかハ作リ

鳴呼ハ死トを衝ひハ死生と彈射シ水ニ掃ク遊実と

繩若せん類はれ情ハありハせんハやれ二免と放て後に

の危とまぬハれ群蟻と波ハと魁選ハれ常と得しも

皆我命と活セし報をとむハ厨ニ醒と絶テ念ハらずん

いハかハいハめハれハめハ悲ハふハとヤハあらハんハ齊宣敵ツ

解カの年とちらハとあらハと盡す其ハと民と保テ天下に王

我々から異^{コト}なるも、ワド天地の生おるも猶^ナえ
因^レ仏性のわくころにたゞ理と知^ルば、枝葉^エ與^レ衆^ノの心
らざらんや。世儒放生とて、小惠^{コト}なりと^テ嘲^ケるるは、是
即^チ収^メ悌^ノ惻^ノ隱^ノの誠より、教して根^ノ心^ヲぬと^テ歎^スる。惑^ノ衆
と^シ發^スるに^シて^モ

○さ中一あるひ、人表徳^ト圓^ト時^ト小^ト後^ト復^ト年^ト久^トくわたり
しづれのひくはず、路にあひ^テ作^ルて^モそれ^ハあ^ラぬ^ハし
ありあまに^テ又^モす^レた^ハひに^テ回^ルり^テ發^スる^ハし
其^レ後^ハ復^シに^シて^モ又^モす^レた^ハし^レぬ

境^ノ山^ノほ^レる^ハ花^ノれ^ハお^ハえ^ハ人^ノも^モた^モま^シぬ^ハる^ハし
○或^レ禪^ノ院^ニに^シて^モ池^ノ頭^ノ月^ノ浮^ル、松^ノ声^ヲま^シぐ^レけ^レて^モ心^ノの^塵
拂^ヒも^シは^レえ^ハし^レわ^レぬ^ハし^レの^傍凡^ノ月^ノ又^モ君^ノが^ハと^モう^レ
ハ^ハし^レつ^レる^ハし^レま^シひ^ハし^レぬ^ハる^ハし

風入^ル古^ノ松^ノ静^カ 月生^ル池^ノ水^ノ圓^カ 由来^ハ是^レ風^ノ月
兩^ノ筒^ノ自^ラ然^ニ々

○古人^ノ之^レ方^々に^シて^モ事^ヲし^レぬ^ハし^レと^モひ^つけ^レる^ハし^レひ^つけ^レる^ハし
あ^ラし^レは^レつ^レる^ハし^レや^レし^レま^シに^シて^モい^はれ^ぬん

流水有期詎能定 奇峯添淚白雲歌

かりれをとりし 縁祿の夢をよめりひつるぬ神の列ハ
師とるごりしとくしるごきとて和せし

離筵掩淚有餘法 折柳撓風愁緒多

一錫隨緣水雲路 山前江上入悲歌

かりの世にひつるしをひつる 袂よいたる病

一會一別水との萍れどく行とすり恨ハ一止の夢はひ

重雲と隔とも日し蓮社のちぢりある多ハ中々金池の

舎これれしとくしるごきとて今一ハあはれぬ

人、おるきぬ 近年の事しゆしとて

あはれ又りあき別れいるふふ縁はまよはしとて

○京師銀た近年こり利とれ貪て甚あはれしとて

別月にゆきしとて 驕張大なるゆ公侯にこりしに

ことし 甲 五月十九日 彼家ゆに 御茶たる園より 封書は

同十七日 遠海に 送り 封書とくく 舟せし 江敷而方

金ありしとて 東都に してし 伊村某 由る由 追放の臣

さしあつてあはれしとて さいはゆふれ人々 而且 貴くしと

欲せざるぬしとて ひとすし 此の禍と 者すしと

能はし其欲と満とや。若倭漢古今一人と終つと能
や。するゆゑ一人の恨をのみしをほかに物分と表し
家屬逐たす。愁にかろ老。百々。嗚呼
夢幻のそ泡沫の身はひんのだらくる。いとも
いくそづくのやぐらと。早れて人歎の私と悲
ふやん。老ハ生悪く。いふべきの。

○年、五月、金銀改鑄のゆゑ天下に。令せむ路を

金銀ともに度長の上品にあり。今より今の金銀信

とありて。銀は又其多。新命はとる。

○筑前福岡里田家。信長。ハハに氏族某一家督のゆゑ
侍。燕者不法の故とや。若北齊の主。臣侍中。和工用と
寔せし。士用ハ倭奸の内。良れを諷諷。而端に。いへ。順徒
化に異る。り。久寔。愛。思。に。陸。に。毎。に。左右に
侍。り。言。辞。容。止。法。の。鄙。藝。と。極。只。燕。者。夜。と。以。て。盡。に
絶。道。智。も。復。若。臣。の。礼。を。く。中。外。巧。言。令。色。と。し。し
ひ。と。く。に。賞。賜。と。貪。り。ゆ。け。し。齊。主。意。と。慥。て。衆。と。好
官。爵。財。用。等。の。國。事。ハ。外。臣。に。分。委。り。三。四。月。に。一。夜
朝。と。視。り。其。外。ハ。專。ら。声。色。と。毀。ひ。て。奸。佞。に。親。む。

彩雲煮玉樹

清沼新金華

又

蓮池露爽

眼思繁金風度

蘭階霧霽

靈臺靜素月澄

○夕月の中らむすあさともくくんとさかひゆり

秋の葉もあちちゆれぬの歌とことしつらふゆきゆき

○或人同盆経に七月すきる味五果と設て佛に供す

果とわ何と、よと之律の中に核果 栗 桃 柿

膏果 梨子 ぶどう 瓜 ぶどうの類 殼果 やまもも 核果 柿 柿の實はこれ 介ありくき果

角果 大豆 けしき ちりめん 果と五菓と呼ぶ

○近世都鄙商家毎に立用の利と半と一未殺年

ふく人の憂ぬ一介歳甲夏我府下金とぬふ

新麦廿四の四律とくくまを他諸物の直とて

准してやとふが割へ後と立用して交易私移し

けとら金と方とん後けけら八百條文とく一士庶と

正親一十七月の初度下等 法所の市人後貸立用の

にけり召捕とて 獄にほめられ侍れよと商人等

とて罪めりとしとてぬる人歎の事

のあまれし今一入に是(秘)とるるゆゑ種のみりしを
いそられ流るるよとくるるは古しとあましとゆりしき
そくをよきとあかりしる

尺一がごの夢をるる世の中に河をよそりてくはるる
アサナハラ海をよそりてくはるる世の中に河をよそりてくはるる

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)



